

医師国家試験問題を利用した医大新入生における喫煙の知識に関する調査

川根 博司, 松島 敏春

川崎医科大学の平成12年度(2000年)の新入生103人における喫煙に関する知識について調査した。まず、新入生オリエンテーションの際に、「喫煙か健康か」と題する講話の前後で同じ5問からなる小テストを実施した。第1回目テスト後、スライドとCD-ROMを使用した講話を30分ほど行い、ついで第2回目のテストを実施した。オリエンテーション終了後には喫煙の害について書かれたプリントを配付した。さらに、オリエンテーションから1カ月経って行われた医学概論の講義の際に、再度同じ小テストを実施した。小テストの問題は、平成12年の第94回医師国家試験に出題された問題を利用した。計3回のテスト成績を比較してみると、新入生オリエンテーションにおいて喫煙と健康に関する講話を行うことは有意義であるといえる。今後の課題としては、新入生が自ら学んで自己を高める習慣をつけることであろう。

(平成12年7月19日受理)

Knowledge of Smoking in Freshmen at a Medical School

Hiroshi KAWANE and Toshiharu MATSUSHIMA

A survey of knowledge of smoking among first-year students at Kawasaki Medical School was carried out. A total of 103 freshmen in the year 2000 class took a written test asking about knowledge of smoking before and after a lecture at the orientation meeting. They took the same test consisting of five questions one month later. The results of the three tests were evaluated and compared. Results suggested that giving a lecture on "smoking and health" at the orientation meeting was useful for students. The future issue for the students is to acquire the habit of self-developed learning. (Accepted on July 19, 2000) *Kawasaki Igakkaishi* 26(3): 135-137, 2000

Key Words ① Smoking ② Medical students ③ Knowledge ④ Education

はじめに

将来の医師を目指して医学部を受験する学生は、健康問題に関する基本的知識が備わっていることが期待される。われわれは以前から当大学における第5学年医学生喫煙状況を経年的

に調査してきたが、喫煙男子学生はほとんどが入学前から喫煙していることを報告した¹⁾。その理由としては、受験生が喫煙の健康に及ぼす影響について無知なのか、あるいは知っているも行動を伴っていないことが考えられる。

今回、われわれは平成12年度(2000年)の新1年生において、喫煙に関する知識についての

簡単なテストを行うとともに、新入生オリエンテーションにおける講話の効果を評価したので報告する。

対象と方法

平成12年度(2000年)に川崎医科大学へ入学した1年生103人を対象にした。方法は新入生オリエンテーションにおいて、「喫煙か健康か」と題する30分ほどの講話をする際に、その前後で喫煙に関する知識を問う小テストを実施した。テスト問題には平成12年の第94回医師国家試験に出されたものを利用した(Table 1)。講話はスライドとCD-ROMを用いて行ったが、終了後に喫煙の害について述べられたプリントも付した。そして、オリエンテーションから1カ月後の医学概論の講義の際にも、講義後に同じ小テストを実施した。それぞれのテストの正解率を出して、成績を評価し比較を行った。なお、テストの解答が講話やプリントからわかるもの

もあるが、正解を直接は教えていない。

結 果

計3回実施した同じ小テストの各問題の正解者数(率)をTable 2に示した。講話前の第1回目テストでは問1, 5の正解率が低かったが、問2~4は過半数が正解しており、特に問2の正解率は95.1%とほとんどの学生が正しく答えていた。講話後の第2回目テストで問2以外は正解率が上昇しており、特に問1の正解率は26.5%から93.1%へと著明に増加していた。また、問3, 4も正解率が60~70%台から90%台に上昇した。医学概論の講義の際における第3回目テストでも、問1~4は正解率が90%以上あったが、最初のテストで成績が悪かった問5の正解率は40.0%にとどまった。全問正解者は最初はわずか2.9%しかいなかったのが、第2, 3回目のテストではそれぞれ39.2%, 32.2%と10倍以上に増えていた。

Table 1. Test for evaluating knowledge of smoking

正しいものに○、誤っているものに×をつけなさい。
問1 我が国の成人男性の喫煙率は漸減傾向にある。
問2 我が国の20歳代の女性の喫煙率は増加傾向にある。
問3 受動喫煙の影響を防止するため分煙対策がとられる。
問4 たばこの煙は一酸化炭素を含む。
問5 喫煙の急性影響として血圧が低下する。

Answer the following questions true or false.

- Q 1. The prevalence of smoking among adult males is tending to decrease gradually in Japan.
- Q 2. The prevalence of smoking among females in their twenties is tending to increase in Japan.
- Q 3. Smoking restrictions in public places are enforced to prevent the effects of passive smoking.
- Q 4. Tobacco smoke contains carbon monoxide.
- Q 5. Blood pressure is lowered as an acute effect of smoking.

Table 2. Students answering each question correctly.

Test	First (n = 102)	Second (n = 102)	Third (n = 90)
Q 1.	27 (26.5%)	95 (93.1%)	81 (90.0%)
Q 2.	97 (95.1%)	86 (84.3%)	82 (91.1%)
Q 3.	77 (75.5%)	95 (93.1%)	82 (91.1%)
Q 4.	62 (60.8%)	96 (94.1%)	81 (90.0%)
Q 5.	28 (27.5%)	49 (48.0%)	36 (40.0%)
Q 1. - Q 5.	3 (2.9%)	40 (39.2%)	29 (32.2%)

考 察

当大学の平成12年度の新入生を対象にして、喫煙に関する知識について小テストを行った。小テストに利用した問題は、平成12年の第94回医師国家試験問題・B・99であり、元来は5問のうちから誤りを1つ選ぶ形式であった²⁾。問1~3は公衆衛生学、問4, 5は薬理学、生理学に関連するのであるが、医学部卒業生でなくても解ける常識問題のように思われる。

問1~3の答えはいずれも○であるが、日頃からニュースを見聞きし、新聞を読んでおれば比較的簡単にわかることであろう。問4についても、タバコ(植物)が燃えると一酸化炭素が発生することは高校生ならば知っていなければ

ならない科学的現象である。問5は×であり、喫煙の急性影響として血圧が上昇するという事は、タバコの煙に含まれるニコチンの作用を理解しておく必要がある。しかし、これも実は中学校で教わることになっている事柄であり、中学校用の保健指導の手引³⁾をみると、タバコ喫煙の心臓・血管系機能に及ぼす影響が述べられている。

当大学の新入生が第1回目のテストで、問1、5の正解者は1/3以下というのは信じがたい結果であった。問4のタバコの煙に一酸化炭素が含まれていることを知らない者が約4割もいたのも驚きであった。また、全問正解した者は3人(2.9%)しかおらず、最初のテスト結果により、新入生の喫煙に関する正確な情報や知識の不足が明らかとなった。そして、オリエンテーションの講話の中で、わが国における喫煙状況の推移、タバコの煙に含まれる有害物質、受動喫煙の影響などについて話したので、第2回目テストにおいて問1、3、4の正解率が向上したと思われる。これらの知識は第3回目テストが行われた1カ月後まで維持されていた。ところが、問5の成績は第1回目だけでなく、第2、3回目のテストでもあまりよくなっていない。

講話ではニコチンについて触れたし、配付したプリントにも喫煙関連疾患として心筋梗塞・狭心症、脳卒中という病気が出ており、ニコチンの生体への作用は自分で考えてもらうことを期待していた。つまり、タバコを吸うとただちに血圧が上昇し、心拍数が増加し、指先の皮膚温も徐々に低下する³⁾とは具体的に教えなかったのである。第3回目テストにおいても正解者が少ないということは、オリエンテーション後に自分で勉強した者がほとんどいないことを示唆している。

オリエンテーションの講話で教えた知識は1カ月後にも記憶されており、講話をした意義はあるものと思われる。しかし、大学生が教えられたことを覚えているだけでは不十分であろう。本年度の入学式でも、勝村学長は「自ら学んで自己を高める」、「暗記する勉強から、思考する学問へと意識を改める」ように新入生に対して訓示されている⁴⁾。今回のテストは彼らが当大学に入学したばかりの時期に行ったので、まだそのような習慣がついていないのであろうが、ぜひこれから医学生としての自覚をもって勉学に励んでくれることを望む。

文 献

- 1) 川根博司, 松島敏春: 当大学医学生における喫煙状況に関する調査, 1998~1999年, 川崎医学会誌 26: 129-134, 2000
- 2) 第94回医師国家試験問題と模範解答, 日本医事新報 3692: 57-133, 2000
- 3) 日本学校保健会, 編: 中学校 喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関する保健指導の手引, 東京, 第一法規出版, 1991, pp 44-47
- 4) 第31回入学式 学長式辞, 川崎医科大学学報 92: 4-5, 2000